

緣陰幽草錄

(暇暑吟中草休)

高田惠忍

身延山

我朝靈鷲境幽深。
 欲歷天台華頂峯。
 西谷跳珠泉淅々。
 高峰飛翠樹森々。
 梵音法鼓鳴琳宇。
 黃葉青杉映祇林。
 本地風光眼前在。
 儼然未散見來臨。

上身延山

我朝の靈鷲境幽深、
 壓せんと欲す天台華頂の峯。
 西谷の跳珠泉淅々、
 高峰の飛翠樹森々。
 梵音法鼓琳宇に鳴り、
 黃葉青杉祇林に映ず。
 本地風光眼前に在り、
 儼然未散來臨を見る。

靈域身延世所崇。
 棲神法窟仰流風。
 菩提梯聳白雲外。
 甘露門開青靄中。
 峰色千秋瞻七面。
 溪聲萬古證三空。
 草庵遺跡今猶在。
 禮拜燒香感窮。

靈域身延世の崇る所、
 棲神法窟流風を仰ぐ。
 菩提梯は聳ゆ白雲の外、
 甘露門は開く青靄の中。
 峰色千秋七面を瞻る、
 溪聲萬古三空を證す。
 草庵の遺跡今猶は在り、
 禮拜燒香感窮らず。

七夕

金風肅颯幽庭。

萬里悲涼銀漢青。

乞巧高樓認閨女。

及期寒鵲類河靈。

人間既有相思樹。

天上豈無同愛星。

好是今宵敲句坐。

千秋傳說也堪聽。

宗祖六百五十遠忌恭賦

聖德乾坤偉。

明如日月光。

奮身倡妙法。

利物及遐方。

金風肅颯幽庭靜なり、

萬里悲涼銀漢青し。

乞巧高樓閨女を認む、

期に及び寒鵲河靈に頼る。

人間既に相思の樹有り、

天上豈同愛の星無からんや。

好是れ今宵句を敲いて坐し、

千秋の傳說也た聽くに堪えたり

聖德乾坤に偉なり、

明なること日月の光の如し。

奮身妙法を倡へ、

利物遐方に及ぶ。

勅賜大師號。

芳流花橘章。

即今修遠忌。

六百五十霜。

日布和上挽詩

流風不斷鶯峰吹。

狛座咸推是老師。

禮佛慇懃欽意態。

接人溫藉見仙姿。

草庵修得白雲底。

佛殿功竣青嶂暉。

底事羈途遷化去。

香城臘月雨聲悲。

勅賜大師號、

芳流花橘の章。

即今遠忌を修す、

六百五十霜。

流風不斷鶯峰を吹く、

狛座咸推すこの老師。

禮佛慇懃欽意の態、

人に接して溫藉仙姿を見る。

草庵修得白雲の底、

佛殿功竣青嶂の暉。

底事を羈途遷化し去る、

香城臘月雨聲悲し。

寄遠藤最洪翁

翁欲賞吾山龍舌蘭有年于此、乃贈此以促來遊。

山陰老漢健逾加、

山陰老漢健逾々加ふ、

鶴髮童顏不自誇、

鶴髮童顏自ら誇らず。

素志常馳林莽地、

素志常に馳す林莽の地、

幽懷偶詣梵王家、

幽懷偶々詣づ梵王の家。

虎溪無客催三笑、

虎溪客無し三笑を催す、

龍舌有蘭開數花、

龍舌蘭有り數花を開く。

八月金風吹肅颯、

八月金風吹て肅颯

遠來偏待枉巾車、

遠來偏に巾車を枉ぐるを待つ。

身延西谷廟

西谷靈蹤也、獨尋、

西谷の靈蹤也た獨り尋ぬ、

依然廟外樹森森、

依然廟外樹森々。

溪流月浸真如影、

溪流月は浸す真如の影、

山堞鳥作常住音、

山堞鳥は成す常住の音。

三諫敢侵安國計。

三諫敢て侵す安國の計、

四難強忍濟生心。

四難強て忍ぶ濟生の心。

低回金字塔前路。

低回す金字塔前の路、

追想疇時淚滿襟。

追想疇時淚襟に滿つ。

再寄山川智應氏鎌倉養病

詩境眼前應展開。

詩境眼前應に展開、

高人養病在鎌臺。

高人病を養ふて鎌臺に在り。

出波仙嶋龍光度。

波を出るの仙嶋龍光度り、

入牖神山鳳態催。

牖に入るの神山鳳態催す。

學綜台當推偉器。

學台當を綜ぶ偉器を推す、

論兼内外見宏才。

論内外を兼ね宏才を見る。

斯言若墜將何奈。

斯言若し墮ちなば將に何奈、

切冀加餐復健來。

切に冀くは加餐健を復し來れ。

本多藤江先生華甲壽言

育英多歲倍精神。

周昨如今壯厥身。

墨意臨池書白雪。

歌心步苑詠陽春。

千竿竹嘯他嘉瑞。

一樹梅開此吉辰。

嬰鏢欽翁無俗念。

盛時甘作葛天民。

閒居初夏

蕉蔭樞堂清氣融。

儘假薄梅克安躬。

薰風拂砌苔錢碧。

殘日射庭榴花紅。

育英多歲精神を倍す、

周昨如今厥の身壯なり。

墨意池に臨みて白雪に書し、

歌心苑を歩して陽春を詠す。

千竿竹は嘯く他の嘉瑞、

一樹梅は開く此の吉辰。

嬰鏢欽す翁俗念無し、

盛時甘じて作る葛天の民。

眼見真如離色。

心無執著喚空。

主賓相對學談處。

一味幽懷在箇中。

壽古梅先生華甲

小閣優游垂絳帷。

只今周甲舉清卮。

日來究盡台當學。

老去閒鈔李杜詩。

修竹心期足模範。

寒梅氣味有餘師。

應躋節彼南山壽。

欽見九如天保姿。

眼に真如を見て色々を離れ、

心執著無く空々を喚ぶ。

主賓相對して學談の處、

一味の幽懷箇中に在り。

小閣優游絳帷を垂る、

只今周甲清卮を舉ぐ。

日來究盡台當の學、

老去閒に鈔す李杜の詩。

修竹の心期模範に足る、

寒梅の氣味餘師有り。

應に躋節たる南山の壽なるべし

欽し見る九如天保の姿。

憶看雲 五首

雲也既亡何處之。

天才敏捷闔宗知。

蕙蘭香夢騷人趣。

風月幽期閒境思。

短榻留塵寂吟榭。

小舸無主泛清池。

黯然追遠生存日。

越雁駭鴻相喚時。

憶起與君相笑言。
恰如兄弟此心敦。
松風坐聽水川茗。
竹葉時斟桐谷鱸。

雲也既に亡し何れの處にか之く

天才敏捷闔宗知る。

蕙蘭香夢騷人の趣、

風月幽期閒境の思。

短榻塵を留めて吟榭寂たり、

小舸主無く清地に泛ぶ。

黯然追遠生存の日、

越雁駭鴻相喚ぶの時。

憶ひ起す君と相笑ふて言ひしを
恰も兄弟の如く此心敦し。
松風坐し聴く水川の茗、
竹葉時に斟む桐谷の鱸。

交誼多年能解事。

斯文幾日不休論。

只今良友向何去。

靈鷲山頭月一痕。

君去帝京徂越州。

他時吾也賦歸游。

踟躕未忘芝田鶴。

浩蕩常追駿海鷗。

南北乖離雖恨事。

車書混一恣風流。

死生維命感何限。

悵望蒼天星斗幽。

交誼多年能く事を解し、

斯文幾日論を休めず。

只今良友何れに向て去る、

靈鷲山頭月一痕。

君帝京を去て越州に徂く、

他事吾也た歸游を賦す。

踟躕未だ忘れず芝田の鶴、

浩蕩常に追ふ駿海の鷗。

南北乖離恨事と雖も、

車書混一風流を恣にす。

死生維れ命感何ぞ限らん、

悵望蒼天星斗幽なり。

玉露凋傷殘菊秋。

看雲忽上白雲樓。

雅筵曾有王張筆。

紫陌還無管鮑儔。

空使遺詩藏篋底。

閒令影像挂牀頭。

禁思佳客遠來際。

鷗鷺爲盟作佚游。

玉露凋傷殘菊の秋、

看雲忽ち上る白雲の樓。

雅筵會て有り王張の筆、

紫陌還た無し管鮑の儔。

空しく遺詩をして篋底に藏せしめ。

閒々影像をして牀頭に挂けしむ。

思ふに禁えたり佳客遠來の際、

鷗鷺盟を爲し佚游を作す。

道心常擬三薰法。

德望還推一代宗。

計到難禁犢思乳。

香城落日恨榮胸。

道心常に擬す三薰の法、

德望還た推す一代の宗。

計到り禁じ難し犢の乳を思ふを

香城落日恨み胸を榮る。

寄似辻顯祥君

想昨金風玉露秋。

相逢和氣遶牀頭。

童蒙喜聽聖賢話。

夫子元知湖海流。

長芋欲搜成笑樂。

幽蘭未發引閒愁。

惟今百里但州徃。

期待音書時付郵。

憶ふ昨は金風玉露の秋、

相逢うて和氣牀頭を遶る。

童蒙聽くを喜ぶ聖賢の話、

夫子元と知る湖海の流。

長芋搜つて笑樂を成さんと欲す

幽蘭未だ發かず閒愁を引く。

惟今百里但州に徃く、

期待す音書時に郵に付せよ。

酒軍邀擊見寬容。

酒軍邀擊寬容を見る。

酒軍邀擊寬容を見る。

寄似小山風傳君

爲宗護法挺生材。

偏喜君家奎運開。

師晉中京名利去。

弟承樺北道場來。

養成心地求真趣。

開拓教田揮辯才。

今日交通稱自在。

及期吾亦欲相陪。

第十三回駿國夏期講習會席上卒賦

寺在江尻綠水濱。

法燈長耀妙蓮薰。

滄州映出悠揚日。

富岳擎來匝匝雲。

爲宗護法挺生の材、

偏に喜ぶ君家奎運開く。

師は中京名利に晋みて去り、

弟は樺北道場を承け來る。

養成心地真趣を求め、

開拓教田辯才を揮ふ。

今日交通自在を稱す、

期に及んで吾亦相陪せんと欲す

第十三回駿國夏期講習會席上卒賦

寺は在り江尻綠水の濱、

法燈長耀妙蓮薰る。

滄洲映出す悠揚の日、

富岳擎へ來る匝匝の雲。

舌判眞空講、玄理。

身無彼我説斯文。

靈山嘉會移于此。

徒衆三千側耳聞。

寄落合雲栖僧正

欽君棲隱遠紅塵。

草榻蒲衣魚鳥親。

禮罷空王薰道骨。

假將令子役閒身。

吟哦到底能超俗。

行實由來自有眞。

清見灣頭風景好。

優游適意亦前因。

舌は眞空を判じて玄理を講し、

身彼我無く斯文を説く。

靈山の嘉會此に移し。

徒衆三千耳を側て、聞く。

寄落合雲栖僧正

欽す君棲隱紅塵を遠く、

草榻蒲衣魚鳥に親む。

空王を禮し罷て道骨薰じ、

令子を假み將て閒身を役す。

吟哦到底能く超俗、

行實由來自ら眞有り。

清見灣頭風景好し、

優游適意亦前因。

和韻古梅先生感懷詩

誰復不歎頹四恩。

斯言若墜奈吾門。

常期取正音容雅。

特念育英心意敦。

大我坤輿推絕瑞。

中流砥柱保孤根。

時難暫去朋猿鶴。

回首青山古道尊。

次韻古梅先生與岡南上人唱和詩

洗足清池上。

閒談興趣長。

莓苔梅下碧。

花竹堞陰香。

誰か復た四恩の頹れたるを歎せ
ざらん、

新言若し墜ちなば吾門を奈ん。

常に取正を期して音容雅なり、

特に育英を念として心意敦し。

大我坤輿絶瑞を推す、

中流砥柱孤根を保つ。

時難暫く去て猿鶴を朋とす、

回首青山古道尊し。

好比謝家苑。

須吟陶令章。

風涼何用怪。

此地水爲郷。

好し謝家の苑に比せん、

須く陶令の章を吟ずべし。

風涼何ぞ怪むを用ひん、

此地水を郷と爲す。

冷泉竹外僧正來將賞龍舌蘭花、賦此爲寄二首

寺在芙蓉山脚陲。

異花龍舌特矜奇。

堪懷退代生仙域。

不識何年別月支。

長幹亭亭風葉動。

清姿郁郁露珠垂。

灰聞者宿將來賞。

偏待巾車過訪時。

寺は在り芙蓉山脚の陲、

異花龍舌特り奇を矜る。

懷ふに堪へたり退代仙域に生す

識らず何年月氏に別る。

長幹亭亭々風葉動く、

清姿郁郁々露珠垂る。

灰聞者宿將に來賞すと、

偏に巾車過訪の時を待つ。

龍舌崇蘭奇彩新。

龍舌崇蘭奇彩新なり、

擊鼓排邪辯。

擊鼓排邪辯を排し、

異葩垂著瑞香匂。

異花著るに垂んとして瑞香匂ふ

椎鐘舉正才。

椎鐘正才を擧ぐ。

明妝綽約含清露。

明妝綽約清露を含み、

萬緣渾一擲。

萬緣渾て一擲、

故態葱籠絕點塵。

故態葱籠點塵を絶す。

雲外老頭陀。

雲外の老頭陀。

萬里殊方移植處。

萬里殊方移植の處、

百年一度偶開辰。

百年一度偶々開くの辰。

次韻行山古梅唱和詩

吾曹獨占堪珍惜。

吾曹獨り占む珍惜に堪へたり、

行公與梅子。

行公と梅子と、

幽賞朝昏待衆賓。

幽賞朝昏衆賓を待つ。

劍氣匹其言。

劍氣其言匹す。

次韻松潭詩呈古梅先生

一默維摩室。

一默維摩の室、

欽六十二加二。

欽す六十二を加ふ、

百雷般若門。

百雷般若の門。

既知天命何。

既に天命の何たるを知る。

江流千里往。

江流千里往き、

學精如理瑟。

學精瑟を理するが如く、

斷磴半空存。

斷磴半空に存す。

詩絢似調梭。

詩絢梭を調うるに似たり。

君拾薪吾水。

君は薪を拾へ吾は水、

到頭同浴恩。

到頭浴恩同じ。

到頭同浴恩。

到頭浴恩同じ。

次韻梅洞古梅唱和詩

兩梅逾雅健。

相供闕詩來。

弘法忙金錫。

題詩健酒杯。

公私身特潔。

名利志方灰。

曷日遭分座。

塵談聽得廻。

次韻竹隱訪古梅于山寺唱和詩

白雲深處寺。

明月影清秋。

竹隱步蒼徑。

古梅凭小樓。

兩梅逾雅健、

相共に詩を闕せ來る。

弘法金錫忙しく、

詩を題して酒杯健なり。

公私身特潔、

名利志方に灰す。

曷れの日か遭うて分座、

塵談聽得し廻らん。

白雲深處の寺、

明月影清さの秋。

竹隱古徑を歩し、

古梅小樓に凭る。

詩同流水速。

禪與白雲幽。

一士今亡矣。

斯詩擬薦修。

詩は流水と同じく速かに、

禪は白雲とともに幽なり。

一士今亡矣。

斯詩薦修に擬す。

次韻古梅先生送森田日教師祖山學頭赴任詩書懷

落日秋風寂法林。

奎運連沒白雲岑。

董尊搜博今無躅。

感上高超亦斷琴。

幽澗不聽芝水嘯。

空堂已絕海音吟。

人生至竟如朝露。

俯仰難堪追憶心。

落日秋風法林寂たり、

奎運連沒白雲の岑。

董尊の搜博今躅無し、

感上の高超亦斷琴。

幽澗聽かず芝水の嘯、

空堂已に絶す海音の吟。

人生至竟朝露の如し、

俯仰堪へ難し追憶の心。

延嶽 三首次韻

迢迢延嶽路。

迢々延嶽の路、

磬韻漏山扇。

磬韻山扇を漏る。

蒼靄縈琳宇。

蒼靄琳宇を縈り、

白雲堆翠屏。

白雲翠屏に堆し。

天台華頂瑞。

天台華頂の瑞、

乾竺鷲峰靈。

乾竺鷲峰の靈。

一具鍾于此。

一具此に鍾る、

眞音誰不聽。

眞音誰か聽かざらむ。

菩提梯上迥。

菩提梯の上迥、

本地展香城。

本地香城を展す。

風籟兼蟬語。

風籟と蟬語と、

水鳴還磬聲。

水鳴還た磬聲。

山深幽見月。

山深く幽かに月を見る、

夜靜不聽笙。

夜靜にして笙を聽かず。

先聖印芳履。

先聖芳履を印し、

根塵萬境清。

根塵萬境清し。

勅額恩榮賜。

勅額恩榮の賜、

鷲峰靈域清。

鷲峰靈域清し。

一登催佛性。

一登佛性を催し、

三禮絕塵情。

參禮塵情を絶す。

青嶂伽藍接。

青嶂伽藍接し、

祇林梵唄轟。

祇林梵唄轟く。

天龍也恭敬。

天龍また恭敬、

唯恨不俱生。

唯恨む俱に生ぜざるを。

寄中野海長山主

海長蕭寺絕黃塵。

海長蕭寺黃塵を絶す。

法炬煌煌兜率鄰。

法炬煌煌兜率に鄰す。

牢記梅花新思想。

牢記す梅花の新思想。

永傳松竹舊精神。

永へに傳ふ松竹の舊精神。

安禪到底能逃世。

安禪到底能く世を逃れ。

行道由來鼎曉人。

行道由來鼎に人を曉らしむ。

初識老師真面目。

初めて識る老師の真面目。

大空高桂一冰輪。

大空高く挂る一冰輪。

丁宗祖六百五十遠忌賜勅額於身延山恭賦

宸翰立正降丹閣。

宸翰立正丹閣より降る。

宗祖餘榮潤墨痕。

宗祖の餘榮墨痕潤ふ。

龍象欣歡搖石洞。

龍象欣歡石洞搖ぎ。

人天拈舞震山根。

人天拈舞山根震ふ。

四難管盡行逾固。

四難管め盡して行 逾固く。

三諫不聽逃亦尊。

三諫聽れず逃るゝ亦尊し。

本化家兒皆感奮。

本化の家兒皆感奮

焚香惕若仰殊恩。

焚香惕若殊恩を仰ぐ。